

① 武蔵生家跡

武蔵は天正十二年（一五八四年）に生まれ、父を平田無二（無二齋）、祖父を平田将監といい、兩人とも十手術の達人であった。こうした武術家の家に生まれ育った武蔵は幼少の頃から武術にたけており、十三歳の時、播州平福で新当流有馬喜兵衛に勝ち、それ以降諸国を巡って剣の道一筋に練磨し、二十九歳で豊前国小倉船島（厳流島）での佐々木小次郎との決闘など、六十余度の勝負を一度も負けていない。武蔵は流儀を二天一流と称し、その兵法を五輪書、兵法鏡に残した。また、書・絵・彫刻・工芸を好み、禅の修業を重ね、「枯木にも春風」等、今日重要美術品とされている数々の作品を残して、正保二年五月（一六四五）、熊本に千葉城にて六十二歳で亡くなり、引削の里に葬られた。

昭和三十四年には、宅跡が「岡山県史跡」に指定された。



② 宮本武蔵生誕地碑

讚甘神社から宮川を隔てた南側に立っている。碑を中心にして約三〇坪（九〇平方メートル）の周囲を玉垣で囲んでいる。この碑は、明治四十三年（一九一〇）に町内外の有志の人たちが、宮本武蔵の遺跡があたかもなくなってしまうことをおそれ、碑を建てて後世に伝えたいと思いついた。碑石は江ノ原にあった自然石を使い、下台石・中台石の上に、八尺の碑石を立て、総高は二丈（六メートル）あった。

二・四坪の碑石を江ノ原から曳き出すのに、小学校の児童も威勢よく参加した。総工費は寄付金で千五百余円、大正元年（一九一二年）十月除幕式を挙げた。

碑の正面には、旧熊本藩主細川護国侯侯爵により「宮本武蔵生誕地」と刻まれ、裏面には、現倉敷市出身の東宮侍講三島毅博士の撰文を刻んでいる。

⑤ 讚甘神社

宮本川に架かる宮橋のたもとにある。真向かいには「武蔵の里五輪坊」の入り口である。讚甘神社は、むかしより讚甘郷中の総鎮守で「荒牧大明神」と呼ばれていた。

「武蔵幼年の時、荒牧の神社に遊んで、太鼓を打つ有様を見て、二本の撥を以て左右の音の等しきを感じ、十手を以て二刀に替えたリ・・・」と、代々十手の達人の家に生まれた宮本武蔵ゆかりの神社でもある。

⑦ 平尾家

慶長五年（一六〇〇）、武蔵が武者修行に出立したとき、家の道具、系図、十手（三つ）、すやりを姉おきん夫婦に渡した。その後おきんの二男九郎兵衛景貞がここに居住し、武蔵家を相続した。庭の池はその時に作られた。辺りには樹齢四百年のタラヨウと樹齢三百年のウツギの古木と屋敷の入口の樹齢三百年の栗の巨木とがある。

⑧ 鎌坂峠

山陰と山陽を結ぶ因幡街道の要衝、鎌坂峠は古い書籍には釜坂、鴨坂、加茂坂とも出ている。隠岐脱出の後醍醐帝がこの峠を越えて京都へ向かったと伝えられ、また、鳥取藩池田侯の参勤交代のコースでもあった。

入つて一人通らない坂道にしては道幅が広く、江戸時代から整備されたのがうかがえる。竹林を抜け頂上につくと、二軒の峠茶屋跡の広場がある。この峠の眺望は武蔵が晩年好んだ熊本の大蔵洞からの眺望とよく似ており、大蔵洞は武蔵が故郷を偲ぶ縁（よすが）としたと伝えられている。

⑩ 一貫清水

武蔵神社から鎌坂を八〇〇メートル登ったところに、年中絶えることのない清水が湧き出ている。この道を通る旅人が喉を潤し、冷たくて美味しく一貫（一〇〇〇文）の値打ちがあることからこの名が付いたという。また、頂上にはお茶屋があり、ここを過ぎる旅人が一貫清水で沸かしたお茶の美味しさをほめたといひ、参勤交代の一行の休み場所でもあったと伝えられる。

宮本武蔵の遺跡があたかもなくなってしまうことをおそれ、碑を建てて後世に伝えたいと思いついた。碑石は江ノ原にあった自然石を使い、下台石・中台石の上に、八尺の碑石を立て、総高は二丈（六メートル）あった。

二・四坪の碑石を江ノ原から曳き出すのに、小学校の児童も威勢よく参加した。総工費は寄付金で千五百余円、大正元年（一九一二年）十月除幕式を挙げた。

碑の正面には、旧熊本藩主細川護国侯侯爵により「宮本武蔵生誕地」と刻まれ、裏面には、現倉敷市出身の東宮侍講三島毅博士の撰文を刻んでいる。

宮本川に架かる宮橋のたもとにある。真向かいには「武蔵の里五輪坊」の入り口である。讚甘神社は、むかしより讚甘郷中の総鎮守で「荒牧大明神」と呼ばれていた。

「武蔵幼年の時、荒牧の神社に遊んで、太鼓を打つ有様を見て、二本の撥を以て左右の音の等しきを感じ、十手を以て二刀に替えたリ・・・」と、代々十手の達人の家に生まれた宮本武蔵ゆかりの神社でもある。

慶長五年（一六〇〇）、武蔵が武者修行に出立したとき、家の道具、系図、十手（三つ）、すやりを姉おきん夫婦に渡した。その後おきんの二男九郎兵衛景貞がここに居住し、武蔵家を相続した。庭の池はその時に作られた。辺りには樹齢四百年のタラヨウと樹齢三百年のウツギの古木と屋敷の入口の樹齢三百年の栗の巨木とがある。

山陰と山陽を結ぶ因幡街道の要衝、鎌坂峠は古い書籍には釜坂、鴨坂、加茂坂とも出ている。隠岐脱出の後醍醐帝がこの峠を越えて京都へ向かったと伝えられ、また、鳥取藩池田侯の参勤交代のコースでもあった。

入つて一人通らない坂道にしては道幅が広く、江戸時代から整備されたのがうかがえる。竹林を抜け頂上につくと、二軒の峠茶屋跡の広場がある。この峠の眺望は武蔵が晩年好んだ熊本の大蔵洞からの眺望とよく似ており、大蔵洞は武蔵が故郷を偲ぶ縁（よすが）としたと伝えられている。

武蔵神社から鎌坂を八〇〇メートル登ったところに、年中絶えることのない清水が湧き出ている。この道を通る旅人が喉を潤し、冷たくて美味しく一貫（一〇〇〇文）の値打ちがあることからこの名が付いたという。また、頂上にはお茶屋があり、ここを過ぎる旅人が一貫清水で沸かしたお茶の美味しさをほめたといひ、参勤交代の一行の休み場所でもあったと伝えられる。

宮本武蔵 生誕の地

劍聖宮本武蔵は天正十二年（一五八四）宮本村（現美作市宮本）に生まれた。文武両道の達人で郷士の誇りとして古くから語り伝えられてきた。特に明治後期以降、郷土史家や剣道家等によって顕彰が進められた。

昭和十二年（一九三七）六月二十七日、朝日新聞連載小説「宮本武蔵」を執筆中の作家吉川英治が来村し、讚甘小学校で記念講演を行った。

不朽の名作「宮本武蔵」によって、一躍日本の、いや世界の宮本武蔵となった。

③ 武蔵資料館

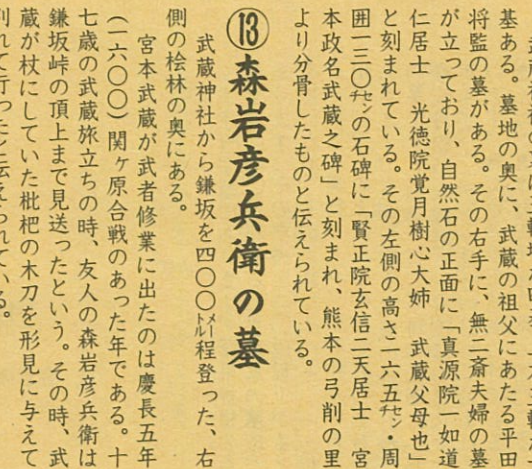
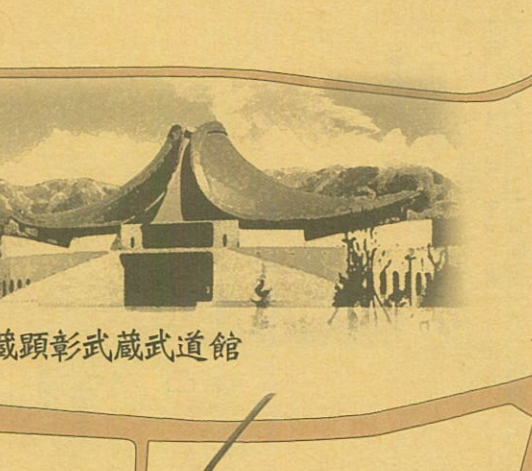
武蔵自筆の「達磨頂相圖」、武蔵自作「狐筆絵図鈔」一類当「小柄」など武蔵ゆかりの書画・刀剣・鎧が数多く展示されている。

④ 武蔵道場

現在は、地元の青少年の剣道練習はもちろんだが、兵法二天一流や空手の稽古に、大学・高校の剣道部の合宿等に利用されている。

⑥ 青年期宮本武蔵像

彫塑の巨匠故郷永直樹氏により、平成七年武蔵の里「五輪坊」庭園内に建立された高さ五・六メートルの若き日の武蔵像。観光客が記念写真を撮影したり、春には桜が咲き誇り、まさに「武蔵の里」のシンボリックな銅像である。



武蔵自筆の「達磨頂相圖」、武蔵自作「狐筆絵図鈔」一類当「小柄」など武蔵ゆかりの書画・刀剣・鎧が数多く展示されている。

彫塑の巨匠故郷永直樹氏により、平成七年武蔵の里「五輪坊」庭園内に建立された高さ五・六メートルの若き日の武蔵像。観光客が記念写真を撮影したり、春には桜が咲き誇り、まさに「武蔵の里」のシンボリックな銅像である。

武蔵生誕地碑前から因幡街道を二〇〇メートル上った右側、宇天王山にある。郷土の生んだ劍聖「宮本武蔵」を祀る神社として、昭和四十六年（一九七二）四月、武蔵奉賛会の趣意に賛同した全国千三百余名の人たちからの浄財五三〇万円をもつて建立した。

拝殿の正面上部の「武蔵神社」の額は、彫書芸術の創始者である彫無季謹作書のものである。また、社頭には、武蔵が好んだ唐の詩人白楽天の詩の一節「寒流帯月澄如鏡」を刻んだ「戦気」の碑が建てられている。

武蔵生誕地碑前から因幡街道を二〇〇メートル上った右側、宇天王山にある。郷土の生んだ劍聖「宮本武蔵」を祀る神社として、昭和四十六年（一九七二）四月、武蔵奉賛会の趣意に賛同した全国千三百余名の人たちからの浄財五三〇万円をもつて建立した。

拝殿の正面上部の「武蔵神社」の額は、彫書芸術の創始者である彫無季謹作書のものである。また、社頭には、武蔵が好んだ唐の詩人白楽天の詩の一節「寒流帯月澄如鏡」を刻んだ「戦気」の碑が建てられている。

武蔵神社から五〇〇メートル程鎌坂を登ると、右手に「本位田外記助の墓」と伝えられる石が立っている。碑銘も何もない自然石である。銘が彫られていないのは、二十七歳の外記が上意討ちにあったことを憚ったものだといわれている。

武蔵の里めぐり

- お問い合わせ先**
- 武蔵の里五輪坊
(宿泊・宴会)
(武蔵資料館・観光ガイド)
電話(0868)78-4600
 - ターガーデン武蔵の里
(温泉・プール・食事)
電話(0868)78-0634
 - 武蔵の里楽市楽座
(特産品とお土産・朝市)
電話(0868)78-4615
 - 武蔵の里大原観光協会
岡山県美作市古町1709
美作市大原総合支所内
電話(0868)78-3111



宮本川河畔の水車小屋

武蔵の里界隈マップ

因幡街道と古町町並み保存地区

播磨国と因幡国を結ぶ道は古くから人馬の往来があり、宮本・今岡・中岡・古町はその道筋にあたる交通の要路でした。この道が因幡街道で、江戸時代は鳥取藩主の江戸参勤の道となり、道路・宿駅が整備されました。

古町は小原宿（おはらじゆく）と呼ばれ、本陣・脇本陣・問屋が置かれました。明治維新以後も「運輸交通頻繁にして旅客の本村（大原村）に宿泊するもの日々平均八九十人下らざりし」と『英田郡誌』が明治中期の状況を記してあります。

因幡街道の宿場町として発展してきた古町は、本陣・脇本陣の遺構が町の中心部にそろって現存し、江戸時代後期から明治・大正期の町屋（まちや）を中心に町並みを構成して、今なお宿場の景観を保っており、昭和六十一年に岡山県から『町並み保存地区』に指定されました。

①大原本陣

本陣には、因幡街道を往来する他の賓客も泊まりましたが、第一の利用者は、因幡二州で三十二万石の鳥取藩主の池田侯でした。天明三年（一七八三）類焼の記録がありますので、現在の本陣の建物は寛政年間（一七九九～一八〇〇）のものといえます。池田侯の参勤交代の途中の宿泊に供するために建てられたものですが、本陣は一般に宿場の素封家（そほうか：金持、財産家）が指定されました。営業は常川に用意しておかねばならなかったようです。大名一行ともなれば人数も相当なもので、格好の座敷も多く、またそれなりの格式ある造りでなければなりません。史実編纂室の調査によると、有元家は宝暦十一年（一七六一）に本陣を命ぜられて明治に至るとあります。それ以前は、元禄十二年（一六九九）没の中村亦右衛門孝政が本陣を併せ付けられていたといえます。数寄屋造の御殿と御成門が今なおその姿をとどめています。

③山王山城跡

山王山城があった朝霧山は大原神社（山王宮）の裏山で、古町の東側にあって尾根型をしています（標高355m）。地元の人たちはもっぱら城山（しろやま）と呼んでいます。

後に新免伊賀守貞重が明応二年（一四九三）下町の竹山城に移ると、この城は廃城となりました。城跡に登ると眼下に古町の町並みが一望できます。

④平賀元義の歌碑

大原神社の石段を上り隨身門を通過して左手に建てられています。歌碑の正面には「弘化四年（一八四七）八月十二日大原の郷三星の茂信が家にて、美作や大原の山つ羊こきたくひて吾は肥にけり 源元義」と刻んであります。

明治の中頃、正岡子規が日本新聞に、「万葉調の歌を世に残したる者、実に備前に歌人平賀元義一人のみ」と絶賛紹介しています。現在では四基（柵原、大原、奈義、津山）の歌碑が知られています。

②脇本陣

この宿場の脇本陣は、屋号を米屋といいました。脇本陣は、大名や幕府の重臣が本陣に泊まる時、家老や奉行の宿舎にあてられました。平常は第一級の旅館（はたご）として営業を行ったようです。建築は、文政二年（一八一九）類焼後のもので、主家（桁行七間半、梁間五間半の町家造り）・玄関・長屋半、梁間五間半、梁間一間半）、池庭・土蔵を備えています。長屋門は、江戸時代普通の家になかったもので、虫籠（むしこ）窓があり、従者の詰めの間や寝間に使われました。北の端の便所には刀懸けがあります。

⑥竹山城跡

竹山城は『太平記』にもその名が出てくる中世後期の吉野郡第一の山城でした。明応二年（一四九三）新免伊賀守貞重は、東部作州に勢を張るために古町山王山城から移り、以降三代一〇八年間、慶長五年（一六〇〇）間が原の敗戦まで在城しました。

山裾まで竹林に覆われていたため、籠城の時は竹を槍のごとく切り倒し、敵の侵入を防ぐことのできた戦国山城の立地条件を備えた天下の要塞でした。城跡に立つと、南東は武蔵の里、北は中国山地の山並み、眼下には古町の家並みが一望できます。

⑤新免備中守貞弘の墓

川上山根小丸山にある。高さ五〇センチの台石の上に、高さ二〇センチ・幅四〇センチの墓石が立っている。貞弘は二代竹山城主新免宗貞の弟で三代将軍の時、代に活躍。武功の誉れ高かった武將の墓碑の正面には、「頼松院清覺大居士 照月院妙鏡大姉」右側面は、「慶長十一年丙午（一六〇六）九月晦日 俗名新免備中守貞弘 左側面は、「慶長六年辛丑（一六〇一）十一月五日同人室 裏面には、「延享元年甲子（一七四四）五月造立」と刻んであります。なお、川上の霊山寺に貞弘の位牌が祀られています。

⑦一乗山霊山寺

霊山寺は、川上の中央、国道四二九号線を左約三〇〇メートル上った小高い所にあります。宗派は古義真言宗で、本寺は高野山金剛三昧院、本尊は聖如意輪観音です。また英中霊場の第三番、美作八十八ヶ所霊場の八十八番札所が結願所でもあります。

『英田郡誌』には「創建は僧空海上入、古くは二重寺山中腹に普門院を創設し、古くは十坊があった。元弘のころ（一一三三～一一三九）六坊は武家に属したため漸く廃坊となつた。その後竹山城主新免伊賀守が寺領九町五反歩を寄附して再興した」とあります。

⑧さつこりの桜

国道三七三線岡山山崎兵庫県境さつこり峠の頂上上下古木二本の桜があります。根元に地蔵様が安置されており、「西町の歩み」には「さつこり峠に享和二年（一八〇二）お地蔵様を一基建立し、記念に桜の木を植樹した」とあります。

⑨智頭急行「宮本武蔵駅」

宮本武蔵生家跡から北方へ五百メートルを右折して八十メートル行くとあります。宮本武蔵誕生の地にあるのでストレートに「宮本武蔵駅」となつた珍しい人名の駅です。到着して目に入ってくるのが、ホームの壁に掲げられた約二メートルほどの宮本武蔵の肖像画で迫力があります。

⑩宮本武蔵初決闘の場

宮本武蔵初決闘の場は、正覚寺の境内にあり、寛政十三年（一七九二）に宮本武蔵が池田侯の側近・利神城主「池田由之」が築いた城下町で、播磨と出雲の国をつなぐ因幡（いなば）街道の「智頭宿」小原宿から続く宿場町「平福宿」に於いて行なわれたといわれています。

⑪宮本武蔵姉お吟の墓

下庄町字蔭にあり、蔭荒神様の参道を右に二〇メートル登ると平尾家の墓があります。その中央を二〇センチ・幅二・五メートル・奥行一・五メートルの石積みの台座があり、その上に二基の自然石の墓石があります。右側が宮本武蔵の姉「お吟」の墓です。高さ一メートルの石塔の正面に「鶴寿院月松妙永禪尼」、右側に「慶長十六年（一六一一）十一月廿四日」と刻まれています。無二斎の娘で武蔵の姉であるお吟は、宮本村の平尾太郎右衛門の養子と右衛門に嫁ぎ、下庄に移って農民になりました。

⑫平田武仁の墓

川上南にあり、宮本武蔵の兄の墓と伝えられています。碑は、高さ一メートルの自然石です。碑の正面には「万治三年庚子（一七一三）須嘉宗心禪定門 文化六年（一八〇九）年百五十年祭 碑の左面には「平田武仁少輔嫡子俗名次郎太夫 行年八十三歳」と刻まれています。

⑬平田武仁の墓

川上岡の竹藪のなかに、高さ四五センチの相好のよい地蔵様が座っています。これは、平田無二（宮本武蔵の父）の墓といわれています。無二は、時の將軍足利義昭から、日下無双兵法術者との号を賜わった剣術者で無二斎とも称しました。「真源院一如道仁養居士」とあり、その妻お政の戒名が横に並べて刻まれています。

⑭宮本武蔵初決闘の場

正覚寺の奥の院といえる由緒ある庵です。この庵に平福の名家田住家の縁起となる道林坊（利神城主別所治の三男）と云う僧がいました。宮本武蔵がこの道林坊のもとで正蓮庵にぬかずいて経を読み、行者山に登って修練したともいわれています。

⑮宮本武蔵初決闘の場

宮本武蔵初決闘の場は、五輪書序文の節の碑があり、宮本武蔵は十三歳のとき「何なりとも望みしたい手合せをしたすべし、われこそ日下無双兵法者なり」という、新当流の達人・有馬喜兵衛の高札を見て、金倉橋のたもとで初勝負をいどみ、一刀のもとに倒したといわれています。



佐用町平福

平福は宮本武蔵のゆかりの地です。今から約400年前、利神(りかん)城主「池田由之」が築いた城下町で、播磨と出雲の国をつなぐ因幡(いなば)街道の「智頭宿」小原宿から続く宿場町「平福宿」に於いて行なわれたといわれています。



⑮正蓮庵

正覚寺の奥の院といえる由緒ある庵です。この庵に平福の名家田住家の縁起となる道林坊（利神城主別所治の三男）と云う僧がいました。宮本武蔵がこの道林坊のもとで正蓮庵にぬかずいて経を読み、行者山に登って修練したともいわれています。

⑭宮本武蔵初決闘の場

宮本武蔵初決闘の場は、五輪書序文の節の碑があり、宮本武蔵は十三歳のとき「何なりとも望みしたい手合せをしたすべし、われこそ日下無双兵法者なり」という、新当流の達人・有馬喜兵衛の高札を見て、金倉橋のたもとで初勝負をいどみ、一刀のもとに倒したといわれています。

⑬正蓮庵

正覚寺の奥の院といえる由緒ある庵です。この庵に平福の名家田住家の縁起となる道林坊（利神城主別所治の三男）と云う僧がいました。宮本武蔵がこの道林坊のもとで正蓮庵にぬかずいて経を読み、行者山に登って修練したともいわれています。

⑭宮本武蔵初決闘の場

宮本武蔵初決闘の場は、五輪書序文の節の碑があり、宮本武蔵は十三歳のとき「何なりとも望みしたい手合せをしたすべし、われこそ日下無双兵法者なり」という、新当流の達人・有馬喜兵衛の高札を見て、金倉橋のたもとで初勝負をいどみ、一刀のもとに倒したといわれています。